
IS this IS? ~いいえメダロットです~

魚介証券

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS this IS? いいえメダロットです

【Nコード】

N8468S

【作者名】

魚介証券

【あらすじ】

メダロットとISのクロスものです。

作者のかなり歪んだ趣味が炸裂しています。ご注意ください。ちなみにメダロットは設定のみです。世界観は基本的にISです。

この作品のメダロットについての説明（前書き）

まあメダロットについて簡単な説明です。わからないことがあったら教えてください。修正します

この作品のメダロットについての説明

メダロットを知らない人の為の簡単な説明です。知っている人は見なくて大丈夫です

メダロットはメダルと呼ばれるAIを搭載しているロボットのことです。

メダロットは兵器ではなく、玩具、または友人という扱いです。またメダロットにはロボット三原則ならぬメダロット三原則なるものがあり、人を傷つけることはできません

またメダロット同士を闘わせるのをロボトルと言い、世界大会も存在します

メダロットにはスラフシステムというシステムがあり、装甲にナノマシンを埋め込むことにより、ダメージを受けても、時間がたてば回復します

またメダロットは太陽光発電と自身が動くことによる発電で半永久的に活動が可能です

メダロットはいかの3つのパーツに別れます

1：ティンペット

メダロットの骨格にあたる部分です。男性型と女性型が存在し、人間の骨格とよく似た形をしています。

2：メダル

六角形のコインのような形をし、様々な絵がかかれ（基本的にコウモリやクラゲなどの生き物や忍者やクイーンなどの職業しかし？や！とかかかてるメダルもある）中央には小さな石がはめてあります。メダルはメダロットにとって脳や心にあたる部分です。また描かれている絵によってメダルは種類が別れます（例、カブトムシが描か

れているならカブトメダル)。またメダルによって得意分野があります(例、カブトメダルは射撃が、クワガタメダルは格闘が得意)また熟練度というものが存在し、射撃パーツを使えば射撃のスキルが格闘のパーツを使えば格闘のスキルが上昇していきます

3：パーツ

メダロットの筋肉及び皮膚にあたる部分です。種類は射撃パーツ、格闘パーツ、補助パーツがあります。

パーツは頭パーツ、右腕パーツ、左腕パーツ、脚部パーツに別れます。

頭パーツはメダロットの胸から頭にかけてのパーツです。胸の部分の背中側にメダルが収納されており、頭に一定以上のダメージを受けると、メダルが排出されを機能停止します。また頭パーツは強力な能力をもつ装備がついていますが、使用には回数制限があります。右腕、左腕パーツはメダロットの腕から手にかけてのパーツです。このパーツの装備には使用に回数制限はありません。また一定以上のダメージをうけると腕全体が黒ずみ、動かなくなります。

脚部パーツは腰から脚部までのパーツです。

脚部パーツは二足、多脚、浮遊、水中、空中、二輪、タンクに別れ、それぞれ特長があります。

脚部パーツには装備はありませんがメダロットの移動速度や回避性能に関わるパーツです。一定以上のダメージをうけると黒ずみ、移動速度、回避性能が著しく低下します

ぶろろーぐとか会話とか（前書き）

注意事項

・メダロット博士とヘベレケ博士はTS&キャラ崩壊というか別キャラ

・アークビートルへの歪んだ愛情がすさまじい（使用者は怪盗レトルトじゃない）

・キッズとかマザーとかの設定ガン無

・メタビーの使用者がイツキじゃない

更に色々ありますがOKという方のみお進みください。

ぶるるーぐとか会話とか

一人の少女がいた。少女は天才だった。いや『天才』という括りにすら入らない天才、あえていうなら『鬼才』とでも呼ぶべき少女だった。彼女はその才脳ゆえに世界に認められず、狭い世界でしか生きられなかった。妹と親友とその親友の弟しかいない両親でさえいない狭い世界。

だから彼女は作った。世界が自分を認めてくれるように。『その発明品』は世界を根本からかえた。

そして、『その発明品』はこう呼ばれた『IS<インフィニット・ストラス>』と。

ISが世の中からでて数年後。またここにも一人の少女がいた。そして彼女もまた『鬼才』と呼ぶべき少女だった。そして彼女もまた世界から認められなかった。さらに彼女には自分を認めてくれる存在が、誰もいなかった。親友も兄弟も姉妹も両親でさえいなかった。彼女の周りにあったのは、たびたび自分に降りかかる暴力と数年前に亡くした両親が残した一冊の暗号だらけのレポートだけだった。そのレポートは誰にも読み解くことができなかった。

しかし彼女は違った。彼女は鬼才である。彼女はわずか5歳という年齢でその暗号を完璧に解き、内容を理解した。いや『解いた』というにはいささか間違いがあるだろう。彼女は、暗号文を『見た』だけで完璧に内容を理解した。そして、両親の研究内容を知った彼女は、両親が生前働いていた研究所へ行き、両親の研究の後を継いだ。周りの人間は、そんな彼女を不気味に思ったが、誰一人として注意しなかった。

そしてそれから三年後、彼女は作った。彼女ほどではないが、ずばぬけた天才二人と共に自分を認めてくれる『友達』を。その『友達』はこう呼ばれた、メダルで動くロボット通称『メダロット』と。

??? side

「本当に大丈夫？」

アキハバラ博士（36歳女性独身）、通称メダロット博士が不安そうな顔で、私の顔を覗きこむ。彼女は篠ノ之束が唯一同等と認めた三人の博士の一人である。

「アキちゃんは本当に二ノツちのことになるかと心配性だなあ。こんなだからアキちゃんは美人さんなのに子持ちだと思われて、30過ぎてもしまだに結婚できないんだよ」そういったのはウサギの耳を頭につけた女性、篠乃之束博士。ISを発明した博士だ。

「うっさいわっ！ポケナス」

アキハバラ博士が束博士に殴りかかろうとするが、横からのびた手によって止められてしまう。

「ダメだよアキちゃん。女の子はガラス細工何だから丁寧にあつかわないと」

彼女の名前はヘベレケ博士。彼女もまた篠ノ之束が認めた三人の博士の一人である。見た目は1×歳だが実際は36歳であり、彼女いわく『えたいなるろり』らしい。そして・・・

「二ノツちなら絶対に作れるよ百合ハーレム！あとできたら、私も何人か分けて・・・へブツ」

百合である。あ、アキハバラ博士に殴られた。

「なにこの子に吹き込もうとしてるんだア？」アキハバラ博士がそのままへべレケ博士の頭を掴み、ギリギリと締め付ける。

「ちよっ！まっ！マジで痛い！頭が砕ける！さっきのはほんの冗談だっ！」

「アハハ。アキちゃん黒い黒い」

もはやカオスである。

「・・・マスター準備が完了しました」

そんな中後ろからふとそんな声がした。私は振り向き、彼に抱きつく。

「ありがとう。アーたん」

真っ赤なボディに頭と胸に長く白い角ついている彼の名前はアークビートル。私の作った最初のメダロットであり、最高の相棒であり未来の・・・その・・・旦那さん／／／でもある。

「・・・マスター／／／」

アークビートル（以下アーたん）が照れたような声を出す。でも私だって恥ずかしいのだ。私は赤くなった顔を隠すようにアーたんに顔を埋める。

「うーんいつ見てもあついねえ」

「まあ彼がいれば、これから先も大丈夫だろう」

「彼が女性型だったら完璧……って冗談だから！アキちゃん無言で顔掴まないでっ！」

上から東博士、アキハバラ博士、ヘベレケ博士である。

「本当にありがとう。IS学園の入学の手続きをしてくれて」

私はアーたんからはなれると東博士に礼をする。

「ふっふっふ。礼にはおよばないよ。二ノツちには今まで送れなかった学生生活というものをあじわって欲しかったし、丁度いっくんと篝ちゃんの入学する年だしね」

「でも本当に入学できるのか？この子はまだ13歳だぞ？」

アキハバラ博士が心配そうに聞く。

「大丈夫。ちゃんとしっかりとちーちゃんに全部丸投げしてきたから」

からからと愉快そうに東博士は笑う。

「……マスター行きましょう二人が滑走路でまっています」

アーたんが荷物の入った鞆をもちながらいった。

「それじゃあいつてきます」

私は三人の博士に手をふる。

「いつてらっしゅーい」

「気をつけるんだぞ。あと寝る前にちゃんと歯をみがくんだぞ。あと知らないおじさんにはついていくなよ。あとそれから・・・」

「いい女の子がいたら写真送って頂戴・・・って冗談だよ！アキちゃん顔怖いつて！」

上から束博士、アキハバラ博士、ヘベレケ博士である。

滑走路につくと二体のメダロットが私を待っていた。

「遅いぜ相棒（親友）まちくたびれたじゃねえか」

そんなことを言ってきたのは、私の相棒のひとりであるメタビーである。彼の見た目は金色のカブトムシである。そして右腕にはリボルバー。左腕にはサブマシンガンがそれぞれついている。

「ご主人準備は万端です」

そう言ったのはソニックスタッグ。白い体に青い尖ったサングラスのようなものをつけている。そして右腕にはソード。左腕にはハンマーをそれぞれつけている。彼も私の相棒一人で、この三体の中で唯一変形できるメダロットだ。

「よしそれじゃあ行こうか」

私は三体に微笑みかける。

「・・・はい／＼／」

「おうよ！行こうぜ！」

「かしこまりました」

アーたんは恥ずかしそうにはにかみ、メタビーは嬉しそうに返事をし、ソニックスタグ（以下ソニックス）は恭しく礼をした。

こうして私ことメダロットの開発者であり、篠ノ之束博士が同等であり同類であると認めた二ノ宮美紀（このみやみき）は私達四人が潜伏していた、ヘブレケ博士開発 空中要塞フューン からでて、IS学園へと向かうのであった。

設定とかネタバレとか

主人公

にのみやみき

二ノ宮美紀

年齢13（誕生日3月27日）

スリーサイズ・体重

秘密ですっ！

身長143cm？（正式な記録ではなく、本人の自己申告のため偽りの可能性有り）

本作の主人公。黒い腰まであるロングの髪で頭にはアホ毛が一本。篠ノ之束が同等と認めた三人の博士の一人であり、同類と認められた唯一の人間。

わずか8歳の時にメダロットを発明した天才でもある。その天才ゆえに篠ノ之束以外で唯一ISのコアをつくれるのではないかと噂され、世界中からねらわれている。

体力はあるが、かなりの運動オンチ。

しかしメダロットへと出す指示は素早くて的確で、戦闘時の状況判断能力はもはや人外の域。

実は孤独が嫌いで、自分の周りにメダロットがいないと過去のトラウマから発作を起こし、過呼吸になる。

ちなみに謎の宇宙メダロットXとしてロボットル世界大会において三連覇している。

IS適性値はC

専用機

・名前ティンペット

・待機状態メダロッチ（メダロッチを転送する腕時計みたいなやつ）東博士とアキハバラ博士とへべレケ博士と主人公の共同開発でつくられた主人公専用IS。武器もなにもない、最弱IS。ついてるのは空をとぶ為のシステムと絶対防御のシステムとハイパーセンサーとメダロッチだけという貧弱装備。東曰わく『あえて言うなら第一零世代』。宇宙開発の為に作られたスーツの構想とよく似ている。しかしこのISの本領はメダロッチの連携にある。・機能一　メダロッチ転送機能。

メダロッチを転送できる（最大三体）。この機能で転送したメダロッチはISに攻撃できるようになり（本来メダロッチは人間を傷つけることができない）、また空をとべるようになる（足元の空間を圧縮し、足場を作るので、正しくは空中を走る）。

・機能二　同調

転送したメダロッチ一体と合体できる。見た目は人間がメダロッチの装甲を纏った感じ。

この機能を使うとメダルと神経が直接結びつき、そのメダロッチの技術が使えるようになる（例えば射撃のうまいメダロッチと同調すれば、射撃の腕がそのメダロッチと同じレベルになる）。これは、同調したメダロッチが無意識の部分を操作しているからである。また同調したメダロッチの装備も使用可能になる。

但しこの機能、二人で一つの体を動かすようなものなのでお互いに深い信頼関係がないとまともに体を動かすことすらできない。

主人公はメダロッチに絶対的な信頼をおいているので、もはや以心伝心というレベルで意思疎通ができ、かなり強力。

・単一能力　???

まだ使用不可能しかかなり強力な能力。

登場メダロット

アークビートル

主人公の最高の相棒。主人公が彼と同調したときの強さはもはや人外の域。特に一発限りの必殺技プロミネンスは直撃すれば、相手のシールドエネルギーを0にできるレベル。性格は『一見クールなようですぐ熱くなる』。但し主人公に対してはデレる。クズとかポンコツとかいう言葉に敏感に反応し、仲間との絆を大切にする。但しメ蟹ツクではない。

メタビー

主人公の相棒の一人。射撃タイプなのに近接攻撃も得意（殴る攻撃リボルバー）。主人公のことを親友だと思っている。

性格は熱血でとにかく熱い。但しちよつと短気。

ソニックスタッグ

主人公の相棒のひとり。近接専門で頭のパーツ隠蔽を使いつつ相手に接近し攪乱する戦法を得意とする。またこの三体の中で変形できる唯一の機体であり、移動速度は三体の中で最速。性格はクールで
ご主人至上主義。ご主人のことを馬鹿にされるとすぐキレる。

いつと視線をそらされてしまった。

やっべー、どうしよう。絶体絶命の危機である。

「……………くん。織斑一夏くんっ!」

「は、はいつ!？」

そんなことを考えていたのがいけなかったのだろっいきなり名前を大声で呼ばれて思わず声が裏返る。

「あつあの、大声出しちゃってごめんね!怒ってるかな?でもね、今ね、自己紹介、『あ』からはじまって今『お』の織斑くんなんだよね。だから自己紹介してくれるかな?」

気づくと副担任の先生が頭をぺこぺここと頭を下げていた。彼女の名前は山田真耶先生^{ヤマダマヤ}。身長は小さく、服のサイズもあわずダボッしているのだから若く……………いや幼く見える。あこの名前絶対両親狙って名付けただろ。

「わかりました。わかりましたから先生も落ち着いて下さい」

「本当ですかっ!約束ですよ!絶対ですよ!」

かばつと顔を上げ、俺の手をとって熱心に詰め寄る先生。とうがか先生近すぎです……………。

まあ男たるものここで引いたら男が廃るってもんだ。後ろを向く。背中に浴びていた視線が直接自分にかかり、かなり気まずい。しかし引けない引いてなるものか。俺は覚悟を決めて口を開いた。

二ノ宮美紀 side

私は席の後ろからクラスいや学園でたった一人の男子を見つめる。私の席は教室の最後尾なので、クラス中を見渡せる。見渡すとクラスメート全員えーといつくんだっけ？に興味深々なようだ。

「どんな子なのかな？」

私は横で床に座っている、メタビーに話しかける。ちなみにアータんとソニックは現在学園の寮の私の部屋で荷物の整理をしている。そんなに荷物もないので昼までには戻ってくるだろう。

「まあ、ぱつとみる限り相棒のことをなにも考えずに否定する奴ではなさそうだな」

メタビーが興味なさげに答える。

「おっ自己紹介は始めるみたいだね」

彼が覚悟を決めたように大きく息を吸い込んだのをみて呟く。

「まあお手並み拝見といきますか」

メタビーもボソツと呟いた。

「織斑一夏ですっ！」

「「「「「.....」」」」」

えっそれだけ？という空気が教室を流れる。流石に彼もこの事態は想定していなかったらしくうつろたえる。しかしすぐに持ち直し、息を吸い込み・

「以上ですっ」

ガタガタとクラスメートが崩れる。そんな中私は・

「へえ織斑一夏っていうんだ知らなかった」

「えっ突っ込みどころそこっ？！もっと他にあったよね!？」

メタビーに絶賛つつこまれていた。

そして自己紹介を終えた彼に迫る黒い影。

パンツッ！

殴る攻撃出席簿？かな？

「げえっ関羽!？」

彼がそう叫ぶとまた

パンツッ！

頭部にクリティカル

「誰が三国志の英雄か馬鹿者」

彼を出席簿で叩いた彼女はそう言った。というかその出席簿とどころ赤い斑点があるんだけど模様だよな!? 絶対そうだよな!? そうじゃなきゃケチャップのシミがなんかだよな?!

「織斑先生。会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえつ。副担任ですからこれ位はしないと……」

山田先生がうれしそうにはにかむ。

「諸君私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。私の言うことをよく聞き、よく理解しろ。できないものは出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳まで鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私のことは聞け。いいな」

うーん織斑千冬にIS学園。それにこの横暴な物言い。だれだが束博士に聞いてたけど誰だったかな?

思い出せず首を傾げていると、教室中に黄色い歓声が響く。

「キヤー! 千冬様、本物の千冬様よ!」

「ずっとファンでした!」

「私千冬様に憧れてこの学園にきたんです! 北九州から!」

「姉御ってよんでもいいですか?!」

「私お姉さまの為なら死ねます!」

うーんこの圧倒的なカリスマ喉まででかかっているのだけどいまいちでてこない。

「……毎年、よくこれだけの馬鹿者が集まるものだ。関心させられる。それとも何か？私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

そう彼女がいうとさらに騒がしくなる教室。

「きゃああああっ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

このくだりを聞いて私は思い出した。そうだこの人は、

「そうだ。『ちーちゃん』だ！」

思わず立ち上がって叫ぶ。その瞬間飛んでくる出席簿。しかし出席簿は私に当たる前に第三者の手によって止められる。

「おいおい相棒はそんな丈夫じゃねえんだ。そんなもん投げられたら大怪我する」

メタビーだった。彼はいつもこんな風にたすけてくれる。

「すまなかつたな。私のことをそんな風に呼ぶのは一人しかいないてな、ついつい手がすべってしまった。あと私のことは織斑先生と呼べ。ついでに二ノ宮お前も自己紹介しろ」

織斑先生がそうだった瞬間教室がシんと静まり返る。

「今二ノ宮っていった？まさか？」

ヒソヒソ

「でも彼女はまだ高校生って年齢じゃないはず」

ヒソヒソとそんな声が聞こえてきて涙がこぼれそうになるがぐっとこらえる。私はもともと人と喋るのが得意ではないのだ。

「相棒……」

メタビーが心配そうにこちらを見上げてくる。

「うん。大丈夫」

そう言つて微笑むとメタビーの手をそつと握る。それだけでさつきまでの不安が消え去り勇気がわいてきたような気がする。そして私は前を向き口を開いた。

「二ノ宮美紀と言います。13歳ですが、学力的には問題ありません。あと専用機をもっています。楽しい学園生活をおくりたいと思つているのでよろしくお願いします」

昨日の夜頑張つて練習したセリフをいってぺこりと頭をさげる。

「」「」「……」「」「」

教室は無言まつたくの静寂。

これはあまりのことに驚いてみんな無言になっていたのだが、そんなことわからなかった私は嫌われたと思って憂鬱な気分になったのだ。

第一話とか自己紹介とか（後書き）

主人公は世界的に有名です

第二話とか授業とか

「気まずいなあ」

私はボソリと呟いた。今は、一時限目が終わり休み時間。私は私は多くの視線にさらされていた。

視線を二分にしてくれた織斑一夏は今は彼に話しかけていった女子とどっかにいってしまった。

隣にいるメタビーも多くの視線にさらされ、居心地悪そうにしている。

まあ私がツチノコ並みに珍しいのは認めるけど。私は世間では『四人の最高頭脳の内の一』と呼ばれているらしい。また東博士やアキハラ博士、ヘベレ博士と違い幼い私はいくらでも取り込めると思われ、世界中の国や企業から狙われているらしい。

だからメダロットを開発した後、メディアの露出はアキハラ博士に任せて、私は東博士と共に五年間逃げ続けていたのだ。

私はメダロット達と暮らしていけるなら別にそのままでもよかったのだが、他の三人の博士の『学生生活くらいの人並みの幸せは味わって欲しい』の願いから学校に通うことになったのだが、ここで一つ問題が生じた。私の頭脳は世界中から狙われているのである。だから私は世界中どの企業も、政府も干渉することのできないここIS学園に入学することにしたのである。そして学校で私が一人で孤立しないように、東博士の数少ない知り合いが入学する今年入学することにし、私の身を守るように四人で私の専用機<ティンペット>をつくり、いざという時にも対応できるようにしたのに・・・

「早々にぼっち確定なのかな？」

「まだ始まったばかりだぜ相棒。胸張っていこうや」

メタビーが励ますように肩を叩いてきた。うう優しさが心にしみるよお。

そんなやり取りをメタビーとしていると織斑一夏が教室に戻ってきた。どうやら会話は終了したようである。私は話しかけようかと思つたが時間をみて諦めた。そろそろ二時限目が始まる時間だ。

パンツ！

あ、また織斑一夏が叩かれた。

うん面白い。二時限目が始まったのだが、授業内容は結構前に暇つぶしで読んだ内容と一緒にだったのですぐこっそりと（本人にはばれないように）織斑一夏の観察をはじめたのだが、うん、彼の授業を聞いている態度がすごく面白い。冷や汗を（遠目から見てもわかる位）だらだらと垂れ流し、目の前につんでる教科書を読んでまた冷や汗をだらだらと垂れ流し、周りを見てはさらに冷や汗を垂れ流す。という行為を繰り返している。うん、あれ間違いなく授業についていけないね。楽しそうに織斑一夏を眺めている私を見て、メタビーは不思議そうな顔をし、私の視線の先へと視線を送り、彼もまた噴出しそうになっている。メタビーも初日から授業についていけないようになっていく生徒が予想外だったらしく、ツボに入ったらしい。

「織斑君何かわからないところあります？」

あ、山田先生が動いた。織斑一夏が山田先生が訪ねたの受けて、教科書をもう一度眺める。

彼のさつきまでの態度を考えると発せられる言葉は多分・・・

「わからないところがあつたら聞いてくださいね。なんせ私は先生

ですから」

エッヘンと胸をはる先生。いいのそんなこと言っちゃって？後悔して
も知らないよ？

「先生」

お、来るぞ、来るぞ。

「ほとんど全部わかりません」

予想通り！メタビーなんてこらえきれずに声を出さないようにしな
がら笑っている。

「え…。ぜ、全部ですか？」

そして山田先生は目にみてわかるほどにうるたえている。

「え、えっと…織斑君以外で今の段階でわからないっていう人どれ
だけいますか？」

先生が拳手を促すが誰も手を挙げない。まあそりゃそうだよね。

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」

織斑千冬先生が若干頭に青筋をたてながら織斑一夏に聞く。

「古い電話帳と間違えました」

パアンツ！

お、また叩かれた。

「必読と書かれてあったらろう馬鹿者」

え？あれ必読だったの？私も読んでないや。まあ以前に読んだ内容とほとんど変わらないから良いけど。

「後で再発行してやるから一週間以内で覚えろよ。いいな」

うわお頑張っつてね。

「後、二ノ宮」

「ふぁッい！」

油断していたのがいけなかったのだろう、いきなり呼ばれて、思わず声が裏返る。

「こいつの勉強を見てやってくれ」

「え…年下に教わるのはちょっと…」

「黙れ」

織斑一夏がなにか不満そうに言いかけるが、織斑千冬先生の一睨みで黙る。

「安心しろ二ノ宮はこの教室にいる私を含めた誰よりもISについて詳しいはずだ」

「え…？」

織斑一夏が、不思議そうな顔をする。

「なんせ彼女は篠ノ乃束が自ら自分と同等であると認め、世間では篠ノ之束以外で唯一ISのコアを作り出せる可能性をもつ学者と言われてる天才だ」

織斑千冬先生それはちょっと言い過ぎだとおもいます。流石にISのコアは作れ…るね。というか私の持つ専用機も束博士との共同開発だし。そんな言葉を受け、またザワザワと教室が騒がしくなる。

「またこの後も注目されるのかぁ」
がつくりと肩を落とす私。

「うん。まあ頑張れ」

メタビーが私の肩に手を置いて言った。

授業が終わり休み時間。私はメタビーと共に、織斑一夏の元へと向かった。

「ちょっといいかな？」

「うん？えつと君は・・・」

「二ノ宮美紀だよ。よろしくね織斑一夏君」

授業が終わった後机に突っ伏していた彼だが、私の言葉を受け、顔を上げる。

「こちらこそよろしくな美紀。俺のことは一夏でいいよ」

「それじゃあ、はいこれ」

私は織斑一夏にさっきの授業中にまとめたノートを渡す。一応わかりやすいように語句の意味をわかりやすく砕いて書いたつもりだが大丈夫だろうか？

「おおっ！ありがとう。こりゃわかりやすい」

織斑一夏は関心したようにノートをめくっている。次とその次にやりそうな授業内容のこともまとめておいたので、しばらくは授業についていけないということはないだろう。

「これ書いたのって美紀なんだよな？」

「うん。そうだけど？」

「美紀って本当に13歳なんだよな？」

「うん。そうだけど？」

「年下に負けてる俺って・・・」

ノートをひとしきり眺めたあと、そんなことを聞いて、一人で何故

か勝手に落ち込む織斑一夏。
そんな彼を苦笑しながら眺めていると、

「ちよつとよろしくて？」

「へ？」

「何かな？」

いきなり声をかけられた。声のした方をみると、金髪ロールの青い目をした女の子が腰に手を当ててたっていた。

「訊いてます？お返事は？」

いかにも今の女子ってかんじの女の子だ。東博士の作ったISは女性しか使えない為、現在彼女のように男に対して見下す態度をとる女性は非常に多い。まあ私や他の三人の博士に言わせてみれば、「少し力が強いだけで偉いと思うなんてまったくのナンセンス」なのだ。強さっていつでも武力だけじゃないはずだしね。

「そちらの方も話をきいていますの？」

「ううん。ぜんぜん聞いてなかった」

別のことを考えてばーっとしていた私は正直に答える。

「まあ！なんですよ、その態度。わたくしに話し掛けられるだけで光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしらっ。」

前言撤回たぶんこの子ISがなかったとしてもこんなタイプだ。な

んかいいとこ出のオーラだしてるし。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

織斑一夏が答える。私も彼女が誰だか知らないはやく自己紹介してくんないかな？というかアーたんとソニックはやく帰ってこないかな？そろそろ戻ってきてもおかしくないんだけど。

「わたくしを知らない？このセシ・・・」帰ってきたぞご主人「リ・・・」マスター整理終了しました「・・・ア」ありがとうございます二人とも。はいこれご褒美のDXオイル「ちよつと話の途中・・・」相棒俺の分は？」

彼女が何か喋ろうとしていたみたいだが私にとっては帰ってきたアーたんとソニックの方が大事だ。彼らに駆け寄ると私は二人にご褒美のDXオイルを渡す。メタビーが何か言ってきたが、無視する。めんどくさいって言ってサボった奴なんかにご褒美なんてあるわけがない。

「で、なにかな？えーと・・・」

「セシリア・オルコットですわ！入学出席にしてイギリス代表候補の！」

ひとしきりアーたん達と戯れたあと彼女に名前を尋ねたのだが何故か怒られた。なんで？

「あ、質問いいか？」

織斑一夏が気まずそうに尋ねる。

「ふん。下々の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生ってなんだ？」

ガタガタつと周りの人間が崩れる。

「私の渡したノートの一ページ目の真ん中あたり読んでみて」

その質問には私が答える。

「？おおっそういうことか！ありがとな」

納得した表情の織斑一夏。というか単語で意味わからない？まあ意外と簡単なところでどつぼにはまる事ってあるから仕方ないのかもしれないけれど。

「お前ってエリートだったんだな」

私に向けた言葉なのかそれともセシリア・オルコットに向けた言葉なのかはわからないが、織斑一夏が関心したようにいった。

「そう。エリートなのですわ！本来ならわたくしのようなエリートとクラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのですわ。その現実を少し理解していただける？」

セシリア・オルコットは自分に発せられた言葉だと思ったらしく。ふふんと胸をはった。

「そうか。それはラッキーだ」

「まあ四分の一っていう結構な高確率だけどね」

上から織斑一夏、私である。

「バカにしていますの？」

おおっまた怒った！なんで？

「だいたいあなたってISについてなにも知らないのに、よくこの学園に入学できましたね？唯一男でISを操縦できると聞いていたから少しくらい知的さを感じさせるかとおもっていましたが、期待はずれですわね。あなたも年齢が足りてないのによく入学できましたわよね？どんな裏技をつかったのかしら？」

見下したようにいうセシリア・オルコット。まあたしかに裏技を使ったというのは間違いじゃないんだけどね。

「いい加減にしろよ下郎」

キレたような低い声この声は…

「ソニック…」

ソニックだった。ぱつと見はわからないが、よく見ると握った手のひらがわなわなと震えている。

「さっきから見下したようなご主人にとり、あげくの果てには、我等のご主人を馬鹿にするだど？ふざけるのもいいかげんしろ。貴様何様のつもりだ？アア？」

「なっ？」

固まるセシリア・オルコット。それにかまわずソニックは言葉を続ける。

「第一貴様ごときがご主人と会話出来ること自体幸運なのに、何なんだその態度はもつと尊敬しろよ？なんで自分のほうが偉い、エリートだと勘違いするんだ？この屑が？ご主人のことを何も知らないのにまるで全て知ってるかのように、口をきくなど頭が腐っているのか？この蛆虫めが」

うん、私のために怒ってくれるのは嬉しいけど、少し頭を冷やそうか？なんか言ってることが支離滅裂になってきてるし若干ループしてきてるよ。

「第一ご主人は我々の創造主であり、希望であり、ご主人様なのだ。それなのに我々の前でご主人を馬鹿にするとは自殺志願者なのか？」
やばい完全に暴走している。熱くなりすぎて関節部からは、シューシューと煙がたっている。

「な、私は試験の模擬戦で唯一試験官を倒したのですわ。それだけでもわたくしの方が優秀だという証拠にはならなくて？」

怒ったようにいうセシリア・オルコット。なんでここで火に油を注ぐようなことをいうかなあ？
案の定反論しようとするソニックしかしここで一つの言葉が彼らを遮った。

「あれ？試験官なら俺も倒したぞ？」

織斑一夏だった。

「は…:??」

「え…:??」

上からセシリア・オルコット、ソニックである。

一瞬で毒気を抜かれ、呆然とするソニック、その瞬間を見逃さずア
ーたんがソニックを後ろから取り長wる。

「なにをする!!貴様!!」

「うん、怒ってくれたのは嬉しいけど少し頭をひやそうね」

私は優しく撫でる。

「ううすまないご主人」

どうやら落ち着いてくれたようだ。そしてさっきの態度を思い出したのか恥ずかしそうにうつむく。
しかしあちらは…

「わ、わたくしだけと聞きましたか?」

「女子だけってオチじゃないのか?」

おお、まだ熱い。ていうか織斑一夏そんなに強かったのか。知らなかったあ。

「つ、つまりわたくしだけではないと…:??」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも試験官を倒したって言うの？まさかあなたも？」
私にまで聞かないですよ。

「うん、まあ多分」

「ご主人の価値がそんな矮小なもの計りきれないわけがないだろう？」
「ご主人の価値がそんな矮小なもの計りきれないわけがないだろう？」
というかソニックまだ暴走してない？

「それってどういう意味なのかしら？」

「えーとっまあ落ち着けよ」

「これ位で乱すとは元がしれるな」

「これが落ちついていられ」

キンコーンカンコーン
グッジョブ予鈴！！

「っ…！また後出来ますわ！逃げないことね！よくって？」

そう言ってセシリア・オルコットは去っていった。
私は新たな厄介ごとに溜息をついた。

「まあ頑張れ相棒」

その優しさが痛いよメタビ

第三話とか宣戦布告とか

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

大いに荒れることとなった三時限目の授業は織斑千冬先生のこの一言から始まった。

一時限目、二時限目は山田先生が教壇にたっていたが、いまは織斑千冬先生がかわりに立っている。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでるクラス代表者を決めないとな」

ふと思いついたように織斑千冬先生が言う。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会のひらく会議や委員会への出席。まあクラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争心は対抗心を生む。一度決まると一年間変更ができないからそのつもりで」

織斑千冬先生がそう言うつと教室がざわざわと色めき立つ。クラス長かあ。誰がなるのかな？

「はいつ。織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

私もそれが妥当だと思つ。彼は世界で唯一なのだからそれなりに目

立つ位置に出しといたほうがいいよね。

「では候補者は織斑一夏…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ？」

「お、俺？」

立ち上がる織斑一夏。というかいままで気が付かなかったのか？さすがに鈍すぎないかなあ？

「織斑。席につけ、邪魔だ。さて他にいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「一つ質問がある」

「なんだ？」

「クラス代表者とは、そのクラスにおいて『最強』の証なのか？」
ソニックが手を上げ、織斑千冬先生に質問をする。

「フム、最強かどうかは知らないが、それなりの実力者になることが多いな」

「なら、我はご主人を推薦する」

ソニックがいきなりそんな爆弾を投下した。騒然となるクラス。

「メダロットが推薦ってありなのかな？」

「二ノ宮さんでもいいかも。専用機持ちだし」

「でも年下だしねえ」

クラスの意見を聞く限り賛否両論だ。まあこの感じだったら織斑一夏が、選ばれるだろう。しかしここで更にクラスの空気を乱すものが一人。

「待ってください。納得いきませんわ！」

セシリア・オルコットだ。

「その様な選出は認められませんわ！大体男や年下がクラス代表なんていい恥さらしですわ！わたくしにセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」

やばい！そんなこと言ったらまたソニックが暴走を！と思い、横をみるといち早く危機を察してくれたアーたんがソニックを抑えていた。グッジョブ！

「先ほどクラスの『最強』が代表者になるとおっしゃいましたね？ならば実力から言ってこのわたくし、セシリア・オルコットがなるのが当然。それをもの珍しいなどという理由から極東のサルや年下にされてはこまります。わたくしはこのような島国までISの技術の修練に来ているのであって、サーカスや子守に来ているわけではありません！」

相当いらついていたんだなあ。すごい言い回しだ。しかしこの後いった言葉がいけなかった

「いいですか！？クラス代表者は実力トップつまりはわたくしセシリア・オルコットがなるべきですわ！極東の猿やそのポンコツロボットに推薦されたちびっ子などではなく！」

「・・・おい今なんて言った？私の大事な友人のことを何て言った？そう言おうと思い、席から立とうとしたが、それより素早く行動したものがいた。」

「おい・・・」

アーたんだ。アーたんはゆらりと立ち上がり、セシリア・オルコットを指差す。

「決闘しろよ」

教室の誰もがその異様な空気に飲まれていた。

私はアーたんを見て気づいた。

アーたんぶちきれてる。

「お前実力がトップって言ったんだろ？ならその実力俺達に見せてみるよ？」

「丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生であるこのセシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね」

フンと自信ありげに胸をはるセシリア・オルコット。まあ私は立ち上がり、彼女を指差して言う。

「セシリア・オルコット。あなたは私達の絆には絶対に勝つことは出来ない」

私はハツキリと宣言する。その言葉を聞いて、セシリア・オルコットがこちらを馬鹿にするかのような表情になる。まあ今はせいぜい馬鹿にしてろ。そう思う。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後第三アリーナで行う。二ノ宮、オルコット、それに織斑はそれぞれ準備しておくように。それでは授業を始める」

「え！？俺も!？」

織斑千冬先生が、ぱんつと手をうって話を締める。完璧に油断していた織斑一夏の意外そうな声が面白かった。

「うう」

「まあ頑張つて」

今日一日授業についていけなかったらしい織斑一夏に苦笑しながら私は授業内容をまとめたノートを渡す。まあこのノートをみなながら予習、復習をしっかりとすれば今日みたいな大惨事は免れるだろう。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

副担任の山田先生が書類を片手にたっていた。

「えっとですね、寮の部屋がきまりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーを織斑一夏に渡す山田先生。

「俺の部屋、決まってるじゃないんですか？前に聞いた話だと一週間は自宅から通学してもらつたという話だと思つたんですけど」

不思議そうな顔をしながらキーと紙を受け取る織斑一夏。

「そんなんですけど一時的な処置としてとして部屋割りを無理やり変更したらしいです。…織斑君そのあたりのことつて政府から聞いています？」

最後の一言は織斑一夏だけに聞いて欲しかったようで耳打ちしていたが、横から聞いていても丸聞こえである。

「うんじゃわからないことあつたら私の部屋に来てね。私の部屋は10333号室だから」

これから込み入った話になると判断した私は織斑一夏にそう告げると自分の部屋へと向かうのだった。

「ふう」

部屋で息をつく。今日は一日色々あつてもう疲れた。もう浴場にまでいく元気もないので、今日はシャワーだけで済ませることにする。ちなみに寮の部屋は基本二人部屋なのだが、私の場合人数の関係上二人部屋を一人部屋として使っている。転校生が入ってきた場合に

入れるらしい。なのであまり自分の荷物をおきすぎないように言われた。

シャワーを浴びた後私はバスタオル一枚でベットに横たわる。その時

「美紀いいい助けてくれえええ」

織斑一夏が部屋に飛び込んできた。私はむくりと身体を起こす。

「どうしたの？」

「助けてくれそうしないと俺が殺される！二重の意味で！」

「ちよっ！まっ！ってキャッ」

織斑一夏に肩を掴まれ、ベットに押し倒される。

「「…」」

ここで一つ思いたして欲しい。私は現在バスタオル一枚なのである。そして傍目から見れば現在の状況は…

「おい、蛆虫遺言はないな？」

「え？誤解だああ」

ソニックがボールのようなものを振り回す。

私はあまりのことに呆然としているが、さき程のことを思い出して、徐々に身体が熱くなってくる。

「ぐすん。汚された」

その瞬間宙を舞う包丁。包丁は織斑一夏の首の横1cmに刺さる。

「…次は当てる」

アーたんだった。

「え…？ちよ…死ぬって！」

投げられる無数の包丁。それを必死に避ける織斑一夏

「おい、なにをして…」

剣道着を着た女子がはいつてくる。そしてベットの上にいる私をみる。そして首から上がみるみるうちに真っ赤になっていく。

「一夏アアアア！」

「ぎゃああああ！」

この日寮から織斑一夏の悲鳴が途絶えることは無かった。

第四話とかVSセシリアとか(前書き)

戦闘描写むずい…

第四話とかVSセシリアとか

あの宣戦布告から一週間後の月曜日の放課後私達は、第三アリーナのピットにいた。そういえば、織斑一夏にも専用機が与えなれるらしい。しかし織斑一夏の専用機はまだ来ておらず、現在彼らは…

「なあ箒」

「なんだ、一夏」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか、気のせいだろう」

「ISのことを教えてくれる話はどうなった？」

「し、仕方無かっただろう。お前もISが無かったのだから」

「まあそうだけど…じゃない！知識とか基本的なこととかあっただろう…！」

「…」

「目をそらすな」

話を聞くとところによると、篠ノ乃箒（最近名前を知った）が織斑一夏にISについて教える予定だったらしいが、篠ノ乃箒は6日間みっちり剣道の稽古だけをつけたらしい。ちなみに私が教えてあげようかと打診したところ、篠ノ乃箒に自分が教えると断られてしま

った。まあ一週間前のあの出来事からアーたんやソニックが、何かにつけ織斑一夏を殺そうとしていたので丁度良かったが。

「お、織斑君織斑君織斑君っ！」

山田先生が、駆け足でこちらにやってきた。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

織斑一夏が、山田先生を落ち着かせようとする。

「は、はい。スーハー、スーハー」

「はいそこでとめて」

「うっ」

訂正遊んでる。

「……………」

「ぶはあっ！まだですか？」

「目上の人間には敬意を払え馬鹿者」

パンツと織斑千冬先生が織斑一夏の頭をたたく。この一週間でどれだけ叩かれたんだろう？

「そ、そ、それでしてねっ！きました織斑君の専用IS」

お、やっときたんだ。えーと確か『アレ』だよ。東博士が最近ノリノリで作っていたあのISだよな？

「二ノ宮こちらは準備に少し時間が掛かる先にやってもらっても良いか？」

「はい。わかりました」

私はそういうとメダロツチにアーたん達を『戻す』。いくら近くに
いることがわかっていても彼らが見えなくなるのは少し辛いものがある。私は涙を流さないように下唇を噛締める
備えつけられているモニターを見るとセシリア・オルコットが丁度アリーナに入ったところだった。

待たせるのは悪いので、私はピットゲートへと向かう。そして

コテン

「あうっ」

こけた。若干鼻を打って涙目になる。

「大…」

「大丈夫ですっ！！」

心配そうに織斑一夏が駆け寄るが、私は彼の言葉をさえぎるようにして立ち上がり、すばやくISを展開。

「行くよ、皆！」

「……おう！／＼了解／了解だご主人」

私の専用IS『ティンペット』が展開される。まあ展開されるといつても『殆ど』ISスーツと変わらないのだが。

「……なっ……」

見ていたうしろの四人が驚愕している姿が、ハイパーセンサーに映る。まあ私でも知らなかつたらこのISをみて驚くだろう。しかし私が使いたかつた機能を使うには装甲という装備でしら邪魔だったのだ。

戦闘待機状態ISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型、特殊兵装有り。

ハイパーセンサーに敵情報が映る。私は深呼吸をするとピットゲートへと進む。

ゲート解放まで一〇〇六七秒

「あらかしらその貧弱なISは？というかそれはISなのかしら？」

セシリア・オルコットがふふんと鼻をならし、こちらを見下すように見る。

セシリア・オルコットの機体は、鮮やかな青い機体でフィンアーマーが4枚背中にある。

そして最も目立つのが、その手に握られている、二メートルを越す巨大な銃器、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk？』

である。

「最後にチャンスを与えますわ」

びつと人差し指をこちらに向け宣言するセシリア・オルコット

「そんな貧弱な機体では私が勝つのは自明の理。わたくしとて弱いものいじめは好みませんわ。ですからみっともない姿を曝したくないければ棄権すべきですわ。いまなら謝罪すれば認めないこともなくつてよ」

「一ついっておく」

「なにかしら？」

「そんなふうには油断していると…足元すくわれるよ」

「そう…ですか！」

その言葉をきいた瞬間スターライトmk?からビームを射出する。私はそれをよけようともしせず眺める。小声でつぶやく。

「メダロット展開」

そして大爆発が起きた。

「フフン。口ほどにもありませんわね」

セシリア・オルコットは完全に勝利を確信した。あのISは微動だにしなかったのだ。それにあの装甲、自分の攻撃が当たれば間違いなく一撃で落とせるだろう。それなのに

「どうして勝利が宣告されませんか？」

困惑する。そして煙がはれたときさらに困惑することになる。

あのISが無傷で浮いていたのだ。そしてその目の前には三体のさんざんポンコツと馬鹿にしたメダロットが『立って』いた。

「な…なんで？確かに命中したはず？なんでですのっ？」

いい感じに混乱してるなあ。私が答える代わりに前にいるアーたんが答える。

「…相殺させたただけだ。攻撃が当たる前に俺の攻撃でな」

「な…」

セシリア・オルコットが絶句する。まあ無理もないだろう。高速で飛んでくる相手の攻撃を自分の攻撃で相殺するなんてどんな神業だって話だ。

「それじゃあこっちからいかせてもらおうっ？」

私がそういとソニックとメタビーは空中を『走る』。メダロット達の脚部には特殊部品が取り付けられており、自分の足元の空間を圧縮し、足場を作ることができる。また走るといふ行為は飛ぶことより遅いイメージがあるが、彼らのリミッターが解放されており、また背中には推進器スラスターもついているため他のISと比べても遜色ない位の速度がだせる。

「ソニック。頭パーツ使用」

「了解」

そういとソニックは頭パーツの『隠蔽』を使用する。これは、特殊な電磁波を出すことによって相手のセンサーを狂わせる効果を持つ。

「なっ・・・なんですの!？」

セシリア・オルコットが驚いた声を出す。それも無理はない。ソニックのいる位置が肉眼で確認できる位置とセンサーで表示されている位置が著しく違うのだから。

セシリア・オルコットはどちらが正しいのか分からず、乱射するがそれをソニックは余裕で回避する。そして

- 殴る攻撃ソード

ソニックが右腕についた剣で素早く斬りつける。 - ダメージ17。

シールドエネルギー残り残量573。

セシリア・オルコットは攻撃を受けたことに一瞬混乱したようだが、ダメージが少ないのを見て、落ち着きを取り戻したようだ。

これがソニックのソードの弱点だ。ソニックのソードは小回りが効いて、素早いので大変便利だが、いかんせん威力が低く精々相手を

攪乱するのが精一杯だ。攻撃がクリティカルヒットでもしない限り、まともなダメージを与えられないのだ。

ソニックが再び相手に接近、セシリア・オルコットに攻撃を加えるが、流石に相手も代表候補生、攻撃後離脱する瞬間をスターライトmk2で狙われる。

「もうあなたの攻撃は見切りましたわ！墜ちなさい！」

セシリア・オルコットがスターライトmk2ね引き金を引こうとするが、そんなこと私の予想範囲内だ。

「メタビーー！」

「おつよ！」

- ねらい打ち攻撃マシンガン

私の言葉を聞いてメタビーはあらかじめ回り込んでいたセシリア・オルコットの右側から左腕のサブマシンガンを撃つ。サブマシンガンの弾はセシリア・オルコットの右腕に命中、スターライトmk2をソニックからずらすことに成功する。

「くっ・・・」

たまらずセシリア・オルコットは自身の両脇からミサイルを発射。強引にソニックとメタビーから離れると、自らの固有装備である自立起動兵器『ブルー・ティアーズ』を四枚展開させる。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

弾幕の嵐。そういつても過言ではない量のビームの弾幕がアリーナに降り注ぐ。これがセシリア・オルコットのIS、『ブルー・ティーズ』の真骨頂。点ではなく、圧倒的火力での面での制圧。その時の弾幕の量と威力は他のISの追隨を許さない。たまらず弾をさけるメタビーとソニック。しかし彼女の狙いは彼らではなかったよ。うだ。

「かかりましたね」

ニヤリとセシリア・オルコットは笑う。セシリア・オルコットはこの時を待っていたのだらう。私とメタビー達が直線上に並ぶこの時を。

「最初から狙いはあなたでしてよ！二ノ宮美紀！」

メタビー達も言い方は悪いが、AIを搭載しているとはいえ、分類は自立起動兵器である。つまり、指令をだすものがいなければ動けないのである。自立起動兵器を止めるには、指令をだしている本体を叩けば良い。自身も自立起動兵器を使っているセシリア・オルコットにもよくわかってのことであらう。

メタビー達がよけたビームが私に降り注いでくる。完璧なタイミング、確かに『このまま』だったら私は為すすべもなく敗北するだらう。しかし彼女は一つミスを犯した。それは私を『装備のない、指令をだすだけの貧弱なIS』と勘違いしたことである。私は降り注ぐビームの雨を見ながら最後の切り札をきる。

「アーケビートル同調」

その瞬間辺り一面が光に包まれる。そして光が晴れた時私はアーケビートルを『纏って』いた。

「な、なんですか？」

セシリア・オルコットの混乱した声が聞こえる。

「これはメダロット同調。私（俺）達の切り札です（だ）」

私達はそう言うつと右腕のビームを発射する。発射されたビームはセシリア・オルコットのブルー・ティアーズの一枚にあたり破壊する。

「さあ終わりにしようか」

私はそう言うつと、一方的な蹂躪が始まった。

一夏side

「な…なんだアレは？」

モニターで試合を見ていた俺達はあまりの光景に絶句する。

先程まで美紀とセシリア・オルコットは互角の戦いを繰り広げていた。まあ代表候補生と互角というのもすごいのだが、美紀の姿が変わってからの戦いはすごかった。セシリア・オルコットの攻撃をことごとく回避し、美紀の攻撃はことごとくヒットする。剣で切り裂かれ、マシンガンで打ち抜かれ、ビームで貫かれ、セシリア・オルコットの装甲はみるみるうちにボロボロになっていく。

「な、なんなんだ？あれは？」

千冬姉も驚いているようで、動揺の色を隠せない。

「あ、し、詳細データが届きました!」

パソコンを使ってこの戦闘のデータをとっていた山田先生が言う
どうやら美紀がこの機能を使ったらこの機能のデータの詳細を送る
ようにしていたらしい。

「な、なんだ?このめっちゃくちゃな機能は?どうしてこんなことを
してあんなに動ける?」

データをみた千冬姉が信じられないといった顔をする。

「あの機能の名前は同調。メダルと神経を直接つなげて、一つの身
体を二人で動かし、お互いの短所を補いあうシステムらしい」

「な…」

千冬姉の説明を聞いて、俺も絶句している。隣の箒も、山田先生も
驚いているのがわかる。だってそうだろう例えばダンス、あれも二
人で一つの動きをするものといえるが、決まった動作をすることで
さえ血もにじむような努力をしなければ、ピットリと同じ動きを出
来ないのだ。

「しかもあの状態で残りの二体のメダロットにも逐一指令を出して
いるらしい」

「え…」

千冬姉の説明にただただあきれることしか出来なかった。

主人公 s i d e

「もうウザったいですわね！」

セシリア・オルコットがこちらにスターライトmk2を向け充填を始める。どうやらこの一撃に全てをかけるらしい。私はセシリア・オルコットにプライベート・チャンネルをつなげる。

「セシリア・オルコット」

「なにかしら」

エネルギー充填開始。頭と胸の角の間に黒いエネルギーがたまり始める。

「あなたじゃ私（俺）達には勝つことはできない」

「絆の力があるからとでも言つつもりかしら？」

「違う」

「受けよ」

「あなたは自分のために自分だけで戦ってる」

「漆黒の太陽の一撃を」

「みんなの為にみんなと戦っている私達にはどうあがいても勝てるはずがない」「」

「余計なお世話ですわー!!」

スターライトmk2をセシリア・オルコットが撃つがもう遅い。

私はアークビートルの必殺技を発動させる。一発限りの大技。

「ダークプロミネンスー!!」

「きゃああああ」

発射されたのは圧倒的な黒。黒は、スターライトmk2ごとセシリア・オルコットを飲み込む。

シールドエネルギー残量0。勝者二ノ宮美紀。

第五話とか少女たちの物語とか（前書き）

今回セシリア・オルコットがセシリア・オリコット化。そして主人公不在

第五話とか少女たちの物語とか

セシリア・オルコットが目覚めるとそこは、保健室だった。

「わたくしは負けましたのね」

セシリア・オルコットはそうつぶやいたが、何故か悔しいといった感情という感情は湧かなかった。

どこか清々しさを何故か感じる。真っ向から徹底的に負けたからだろうか。

「おっ目が覚めたか」

そんなことを一人で考えていると、横からそんな声が聞こえた。横を向くと、一体のメダロットがいた。

彼女は確かメタビーと呼んでいた、金色のカブトムシは、保健室の椅子に座りながら何か書類を読んでいた。

「なんでいますの?」

「お前が戦闘終わった後気絶したから、相棒に様子を見とくように言われたんだ」

彼は書類から目を離さず答える。

「彼女はいま何処に?」

「第3アリーナで今頃織斑一夏と戦っているところかな」

「あなたは行かなくて大丈夫ですか？」

疑問に思いたずねる。

「大丈夫。聞いたところによると、織斑一夏が試験官に勝ったのはたまたまで、ISを起動させたのも入試会場と試験の時だけだそう。そんな相手に俺が抜けただけで負けるほど俺の相棒は弱くない」

「信頼してますのね」

「ああ、俺の最高の相棒だからな」

そう恥ずかしがらず返せる彼が羨ましかった。自分にはこんなに信頼の置ける仲間はいなかったから。彼女が言っていた『一人で戦っている』ということもあながち間違いではないのかもしれない。だからだろう、

「わたくしのお話を聞いてくださいますか？」

誰にも話すこともないと思っていた昔の話をしようと思ったのは。

「わたくしの母は強い人でした。しかし父は名家に婿入りした引け目を感じていたのか、母の顔ばかりを気にする弱い男性でした。そんな二人を見ていたからでしょうか、母のように強い女性になりたいと思います、男性を軽蔑するようになったのは」

「…」

窓の方を眺めながら話を続ける。彼は黙って聞いている。

「そして三年前両親は鉄道の事故で同時になくなりました」

「わたくしには莫大な遺産が残され、様々な人から遺産を狙われました。だからわたくしは遺産を守るためあらゆる勉強をしました。そしてその一環でつけたIS適正ですとでA+をだし、国籍保持のため政府から様々な好条件をだされました。わたくしは両親の遺産を守るためそれを即断しました。そして第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選ばれ、稼働データと経験を得るためにこの日本にきました…。すいませんね関係の無い話をベラベラと」

いまもなお黙り続けている彼に笑いかける。

「…とある少女の話聞いてくれないだろうか？」

ずっと黙っていた彼が唐突に話し始めた。

「その頃は俺はまだいなかったから、これはとある人から聞いた少女の物語だ」

「少女は生まれてから、3年ほどまでは幸せだった。二人の両親は研究者で、夢物語を研究していると周囲からは馬鹿にされてはいたがそれでも娘にめぐまれ、少ないながらも優秀な助手にも恵まれ、確かに幸せに暮らしていた。しかし少女が生まれてから三年、二人は突然死んでしまった。不思議なことに何時、何処で、どうして死んだのか明確な記録が残っていないのだがまあいまはそれはどうでもいい。少女は親戚の家に預けられた。そこで少女は毎日のように暴行を受けた。だから少女は両親が残してくれたレポートを必死で読んだ。他の遺産は全て親戚に奪われていたから。そのレポートだけは暗号とすらわからないくらいの暗号で書かれていて、誰にも相手にもされなかった。だから彼女の元へと届いたのだらう。少女は必

死で両親の温もりの残りを探すかのように読んだ。幸い少女は天才だった。そして五歳という年齢にしてレポートの解読に成功する。そして少女は両親の働いていた研究所へと赴いた。そして、両親の助手の研究の見学という名目で少女は両親の研究の続きを始めた。周囲の人間はそんな少女を気味悪がって誰も注意しなかった。その頃になると親戚も少女にたいして興味を失ってせいぜいたまに腹いせに暴力を受けるだけだったらしい。また両親の助手も敬愛していた上司を馬鹿にされ丁度心が腐っていた時期らしい。少女の研究の手伝いはするものの最低限の接触しかなかったらしい。ちなみに今でもこの助手達はもつとあの時声をかけてやれば良かったと後悔しているらしい」

「…」

何故だろうその話をしている彼の姿がとても苦しげに見えるのは。セシリア・オルコットは黙って彼の話を聞き続ける。

「そしてそれから三年後、少女は研究を完成させ、とある発明品を作った。その時その助手達は気づいた。少女が欲しかったのは、名誉でも、家族でも、両親でもなくただ『愛』が欲しかっただけだった。しかしその頃には人間は、世界は、少女に冷たく当たりすぎてしまった。彼女の世界は彼女とその発明品だけの世界に閉じ込められてしまった。そしてそれから時間が過ぎた今でも少女は人間を信用せず、他人行儀で接するところがあるらしい。自分の面倒を見てくれた人たちでさえ、博士と呼び、それ以外の人はフルネームで呼ぶ。発明品たちには愛称をつけて呼ぶにも関わらずだ。少女は人間を信用していないことを隠しおおせていると思っっているようだが違う。少女は人間が傍にいるときはけして眠らないし、発明品たちに見せるような笑顔を人間に向けることもない」

セシリア・オルコットは彼が誰の話をしているか気づいていた。しかし気づかないふりをして訊ねる。

「その少女は今は幸せなのでしょうか？」

「多分少女にとっては幸せなんだろう。しかし横でそれを見ているものが幸せかどうかはわからない。そしてここからは独り言になるんだが、もしいまからでも少女に愛を無償の愛を注いでくれる友がいたら、もしかしたら少女を閉じ込められた世界から助けだしてくれるんじゃないかと、そう思うんだ」

「…そうですね」

「あくまでこれは物語だからな」

「もし、そんな少女がいたとしてもわたくしは少女の『友』にはなれないと思いますわ」

「なっ…！」

思わず立ち上がった彼。その目には何故か怒りが見える

「この話は物語なのでしょう？」

「まあそうだが」

落ち着いたのか席に再び座りなおす彼。それをみてセシリア・オルコットはクスリと笑う。

「たぶんそんな少女にあつたら、友より先に なりたいと思って

しまうもの」

微笑みながらセシリア・オルコットはそう答える。

「そ、それは本当か？」

彼が動揺しているのがわかる。そんなおかしなことを言っただろうか？

「ええ、でも発明品たちがそんなこと許してくれるかしら？」

「も、問題ない。むしろ是非と頼むはずだ！」

先ほどまでとは違って嬉しそうな彼に思わず笑ってしまふ。

「それではわたくしは疲れたので、一眠りしますわ。試合が終わったころまたおこしてください」

「わ、わかった」

そういうとセシリア・オルコットは眠りについたのだった。

第六話とかVS一夏とか

織斑一夏は憂鬱だった。成り行きでクラス代表決定戦などに放り込まれ、更に相手は代表候補生という人外チートとそれを圧倒的实力で沈めた規格外（化け物）。

（正直勝てる気がしねえ）

自分を一週間鍛えてくれた幼なじみには悪いが、クラス代表なんてめんどくさいものをやりたくもなかったし、適当に負けてさっさと終わろうかななどと考えていた。

・ 一次移行が終わり、自分の装備を見るまでは
一次移行した自分の装備の名前は雪片弑型。自分の尊敬する姉が愛用していた武器、雪片の名前を冠する武器。これを使って負けることは姉の名前に泥を塗ることになる。

（こりゃ負けられねえ）

そう純粹に思う。自分がバカにされるのはいい。自分がそれに対して腹を立てる程実力がないのは熟知している。しかし、自分の実力不足で努力している知り合いがバカにされるのは耐えられない。織斑一夏はそんな人間だった。

「箒」

「な、なんだ？」

後ろで不安そうにこちらを見つめている幼なじみに声をかける。

「勝ってくる」

そついい前を向いたままサムズアップ。

「あ、ああ勝つてこい」

何故か顔を赤くする幼なじみの言葉を身に受け、ますます負けられないという思いを強くするのだった。

・ゲート解放まで残り二．　一八秒

「おつきたきた」

私は空に浮きながら織斑一夏がこちらに飛んでくるを眺める。

メタビーをセシリア・オルコットの看病に行かせたので今回はアータんとソニックの二人で挑むことになる。

そしてソニックは、小回りを捨てた代わりに威力を上げたソニックスタッグの後継機、ルミナススタッグにパーツを変えている。ルミナススタッグはソードとハンマーを腕の中に隠し、ソニックスタッグの首から下に青い装甲をつけた姿だ。

ちなみに私は最初からアータんと同調している。これは最初は、メダロットの展開と同調は試合開始前にしたら反則かな？と思っていたのだが、セシリア・オルコットとの試合の後先生に聞いたところ、最初から展開も同調もしてもよいらしい。

「あれもう一体いなかったか？」

白い騎士のようなIS『白式』をまとった織斑一夏が聞いてくる。

東博士が作っていたのがこれならば、武器は近接用の刀一本という超接近型ISだったはず。

「セシリア・オルコットの介抱に保健室に行ってるから今回は休み」

「つまり手を抜いていると？」

なめられていると思ったのか力強く『雪方式型』を握りしめる織斑一夏。

「勘違いしないで」

私は右手を織斑一夏に向け指差す。

「これくらいで負ける程私（俺）達は弱くない！！」

「そうかい！！」

そう言うところらに向かつて切りかかってくる織斑一夏。だが甘い！

がむしゃら攻撃ハンマー

ソニックが織斑一夏に接近すると、左腕のハンマーで殴り飛ばす。がむしゃら攻撃は回避と防御を捨てることで絶大な威力をたたき出す攻撃である。そしてソニックが今つけている『ルミナススタグ』は小回りを捨てる代わりにソニックスタグより高い威力を叩き出すことの出来る機体である。つまり何が言いたいのかということ…

「なっ…」

織斑一夏が驚くのも無理は無い。ソニックの先ほどの戦いは、相手を翻弄しすばやい攻撃で手数を増やし相手を削り取っていく戦い方だった。つまり一撃一撃は軽かったのだしかし今ソニックの攻撃は相手のシールドを貫通し、織斑一夏の装甲にヒビを入れていた。

「だから言ったでしょう勘違いしないでと、命令を出す機体が少なければ、より緻密な命令をだすことができる。数が減ったからと

言って安易に弱体化したとはいえないのよ」「

殴る攻撃ソード

がむしゃら攻撃ハンマー

織斑一夏に接近したままソニックがそのまま連続で攻撃を放つ。ルミナススタッグは癖の強い機体なので、一撃離脱と言った器用な作戦を取ることができない。よって一回接近したらできるだけダメージを与える戦法をとることになる。ソニックの放ったソードは織斑一夏にヒットするが、ハンマーは見切られて避けられる。流石剣道経験者、目がいい。

「らあっ!!」

雪方式型を攻撃が空振り姿勢を崩したソニックに切りかかる。

狙い撃ち攻撃ビーム

私は左腕のビームを発射する。ビームは織斑一夏に命中し、織斑一夏は予想外の攻撃に姿勢を大きく崩す。

殴る攻撃ソード

殴る攻撃ソード

更にそこにソニックが連続で攻撃を放つ。頃合だと思った私はソニックを後ろに下げさせ、待機させる。

「二対一ということを忘れないで（るな）」

「クソッ」

織斑一夏はあせっている。このまま冷静を欠いた状況なら楽々勝てるだろう。

「クソッ」

思わず悪態をついてしまう。相手は強いとは感じてはいたが、予想以上だった。相手が一体減ったと聞いたときは、これで少しは楽になるかな？などと考えていたがそれは全く甘い考えだった。こちらの攻撃はことごとく読まれ、攻撃のスキをつこうとすれば絶妙なコンビネーションで防いで、こちら側に生じたスキを付いてくる。

もうダメなんじゃないんだろうか？

ふとそんなことをふと思う。

敵うわけが無い

相手が強すぎたのだ。

別に勝つてもクラス代表者になるだけだ。そこまで勝ちにこだわらなければならない。相手がここまで強ければ別に負けても千冬姉の名前に泥を塗ることも無いだろう。それよりこのまま無様にあがくほうが、泥を塗っていることにならないだろうか。

いっそのこと降参しようかと思っただその時ふと幼馴染の顔が思い浮かぶ。こちらに向かつて祈るように手を握り締める幼馴染。ハイパーセンサーですら感知できない場所にいるはずなのになぜかはつきりと思い浮かべることが出来る。

（そうだ。何をやってるんだ？俺は？）

自分の武器『雪方式型』をみて先ほどまでの自分の考えを自嘲気味に笑う。なんだ？諦めるって？まだ手札をすべて切ったわけじゃないのに？相手が強い？そんなの戦うまでから百も承知だっただろうが？相手ははるか格上、そんな相手に勝つためには…

「一か八かの賭けにでるしかねえだろうがああああ!!!」

そう叫ぶと雪片式型の能力『零落白夜』を発動する。ふとこの能力を説明した千冬姉のことを思い出す。

「『バリア無効化攻撃』？」

「そうだ。この能力は相手のシールドを無視して相手に直接ダメージを与え、絶対防御を発動させる能力だ」

「すげえ。それじゃ無敵じゃないか？」

思わずそんな声がもれてしまう。

「馬鹿者そんなものがノーリスクで使えるか」

パンツ

頭を叩かれる。ISを展開しているのに痛いのは何故だ？

「この能力は発動するのに大量のエネルギーを使用する」

「-それってつまり」

「そう、両刃の剣だ。決まれば勝利する確率は大幅に上昇するが外せば敗北は必須。ここぞという時に使え」

そんなものを使えこなせるのだろうか？不安そうな顔をする俺に千

冬姉はふつと笑いかける。

「心配するな。お前なら使いこなせるさ。なんせ」

「私の弟なのだからな」

「うおおおお！！」

相手に向かって真っ直ぐ飛ぶ。相手もこちらの誘いに乗ってくれたように、頭と胸の間でエネルギーが充填されるのが見える。

たぶんセシリア・オルコットとの戦闘で最後に決めたあの一撃だろう。

「受けよ」

俺は負けられないんだ！漆黒の太陽の輝きを

千冬姉の為にもそして何よりも

「ダークプロミネンス！！」

大事な幼なじみの筈の為に！！

「切り裂けえええ！！」

黒と白がぶつかり合う。

「ウオオオオオ！！」

まだまだ！まだやれる！俺は更に雪片式型にエネルギーを注ぐ。そして、

「ダシヤアアッ！」

黒を切り飛ばす。そして目の前には、右腕を構えた二ノ宮美紀の姿。

「へっ？」

「ゴメンね」

・うつつ攻撃ビーム

・シールドエネルギー残量0。勝者二ノ宮美紀

第七話とか親子とか（前書き）

おくれて申し訳ありません。でも授業、部活と忙しくなってきたので多分これからは基本週一更新になると思います。

第七話とか親子とか

織斑一夏side

「よくもまあ無様に負けてきたようだな」

ピットに戻ると千冬姉がうでを組みながらそんなことをいつてきた。

「格上の相手に真正面から挑むからこうなるのだ馬鹿者」

「…はい」

うなだれるしかない。今冷静に思い返せばもっと打つ手はあっただろう。まあ終わったものをどうこう言ってもどうしようもないのだが。

「しかしまあ…悪くは無いです合だったな」

「?!」

千冬姉がデレた！びっくりしている俺を無視して、千冬姉は取り繕うように言葉を続ける。

「まあ今日みたいな無様な負け方をしたくなければ、訓練に励め、暇があったらISを起動しろいいな？」

「はい」

今にやけてしまえば出席簿の一撃が飛んでくる。思わずにやけそう

になる顔を必死に押さえ、反省しているように下を向く。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑君が呼び出せばすぐに展開できます。但し規則があるのでちゃんと読んでおいて下さいね。はい、これ」

どさっと山田先生が電話帳のようなルールブックをおく。その光景に少しうんざりする。何ページあるんだよこれ…。

「何にしる今日はこれで終わりだこれで休め」

そんなことを言ってくる千冬姉。先ほど見せてくれた優しさは欠片も残っていない。

「帰るぞ」

その言葉を聞いてピットから一人で出ていく幼馴染。

「おい！ちよつと待ってくれ！」

慌てて追いかける。全くこいつももう少し優しくしてくればいいのに。

そういえば、セシリアとの試合はいつやるんだろっ？そんなことを思い出したのは寮の近くについてからだ。まあ明日聞けばいいかそう考えると俺はそのことについて考えることをやめた。

「何処までいくの？」

「もうすぐだ」

メタビーが私の腕を引っ張りながら答える。試合が終わった後、寮の部屋でくつろいでいた所、メタビーが戻ってきた。どうやらセシリア・オルコットは、怪我もなにも無かったようでもう保健室から出て、部屋に戻ったらしい。まあ特に興味も無いのでベットの上で本をよんでいたところ、先ほどまでアーたんソニックと話し合っていたメタビーが、私に行つて欲しいところがあるということ、ここまで案内されてきたのだった。

「よし、ここだ！ここ」

「メタビー一体何を…？」

私は言葉につまった。なぜならそこには…

「夜分遅く申し訳ありませんわ」

セシリア・オルコットがそこにいたからである。

「何で…？」

「相棒と話があったのは、俺じゃなくてこいつだからさ」

「え…？」

わけがわからない。もしかして今日負けたことに対する恨みでもぶつけに来たのだろうか？でもそれならメタビーが許さないだろうし…？混乱している私をみて、セシリア・オルコットは微笑みながら言った。

「実は、わたくし彼からとある少女の話をききましたわ」

「へ…？」

メタビーが話す少女の話、それってもしかして…

「その話はとても悲しい孤独な少女の話でした」

やっぱりそれって…

「その話を聞いてわたくしは思いましたわ。わたくしは「やめてよ！」「…え？」

思わず話をさえぎってしまう。頭の中が真っ白になっていく。

「人の傷口（過去）をえぐってなにが楽しいの？ねえ答えてよ！答えてっ！」

「…」

裏切られた。信じていたのに。なんでメタビーはこんなことを？もしかして私は存在してはいけないんだらうか？メダロットにまで拒絶されたら、私はどう生きていけばいいのだらう？そんな思いがこ

み上げてきて、目から涙がこぼれていく。
いやだ。いやだ。独りはいやだ。誰か私を見て。誰か私を助けて。
またあの頃に帰りたくない。誰か…誰でもいいから私を…愛して？
その瞬間私の視界が真っ暗になった。

「わっぷ！？」

視界は真っ暗なのになぜか安心できる。顔全体が何か暖かく柔らかいもので包まれている。

「このままわたくしのお話を聞いていただけませんか？」

セシリア・オルコットは私を『抱き』しめながら言った。

「え…？」

人に抱きしめられた記憶なんて無かったからどうしたらいいかわからない。混乱している私を無視してセシリア・オルコットは話を続ける。

「その話をきいてわたくしは思いましたわ。わたくしはそんな少女の…」

ここで一旦セシリア・オルコットは言葉を切り、私の頭を優しく撫でた。

「『母』になりたいと」

「えっ？」

顔を上げれば、セシリア・オルコットが優しい笑顔で私を見ていた。私はこの顔を知っている。まだ研究所でメダロットを開発していた頃、研究所にいく途中でみた親子の母親のほうがこんな顔をして子供をみていた。そう私には、けしてむけられることは無いと思っ
ていて、そしてなによりも欲しかった、羨ましくてたまらなかった、そんな笑顔。

「な…んで？」

気がついたら涙は止まっていた。私はセシリア・オルコットを見つめる。私を見つめてくれるそのまっすぐな優しい笑顔が嬉しくて、それが消えてしまわないか不安で目が放せなくなる。

「さあわたくしにもわかりませんわ。ただ何故かあなたの為に強くなり
なりたい、そう思いましたの」

そういつとセシリア・オルコットは優しく私の髪を優しく撫でる。

「それじゃあセシ」母親なのでから名前で呼ぶのはおかしいです
わ「…うう」

笑顔で強要してくる。うう恥ずかしいよお。

「マ…ママ／／／」

恥ずかしくて顔から火を噴きそうだ。

「な…なにかしら／／／」

セシ…ママが恥ずかしいのか顔を赤らめる。でも私だって恥ず

かしいのだ。我慢してもらっつかない。

「ママってことは一緒にお風呂に入ってくれるんだよね？」

昔本で読んだ知識を思い出して聞く。

「勿論ですわ」

やっぱり本当にママなんだ。いや本当にそうかもっと確かめないと。

「ママ」

「何かしら」

「たまには一緒に寝てくれる？」

「たまにはとは言わず毎日でも」

「ママ」

「何かしら」

・・・・・・・・・・・・・・・・こんなやり取りが私が疲れ果てて眠るまで数十分のあいだ繰り返し広げられるのだった。

セシリア・オルコットside

疲れたのか胸の中で安心しきったように眠っている少女を抱きあげ
る。少女、二ノ宮美紀、自分の娘になった少女は小柄でそしてとて
も軽い。

「ママア」

寝言でそんなことをいいながらこちらをぎゅっと抱きしめてくる少
女が愛おしくて、思わず微笑んでしまう。

「さて、門限の時間も近いことですし、帰りましょうか」

ずっと横で無言で先ほどまでのやり取りを眺めていた彼女の相棒に
声をかける。いくら人でないとしても、あの光景を見られていたの
は少々恥ずかしい。

「ありがとうな」

彼がポツリとつぶやいた。

「いえ、むしろ御礼を言いたいのわたくしのほうですわ」

最初あった時にあそこまで暴言を吐いた自分のわがママを彼は聞いて
くれたのだ。感謝はするが、御礼を言われる程のことを自分はし
ていないと思う。

「いや、お前はどんな人間にも出来ないことを成し遂げてくれた。
相棒の心を人間に対して開くというな。それにこれから色々大変に
なるだろうしな」

「どづいづいことですか?」

訳がわからず首をかしげる。

「いやさっきのやり取りでわかるように相棒の精神年齢はすごく幼い。精神が成長する機会がなかったからな」

だからと彼は言葉を続ける。

「多分これから相棒は、お前にすごく依存するぞ。お前が鬱陶しくかんじる位に」

俺らに依存する割合もすごいもんさと彼は自嘲的に笑う。

「だけど、けして裏切らないでくれ。多分この状態で裏切られたら、相棒は精神は完璧に壊れてしまう。相棒の精神は綱渡りのようなギリギリの不安定な状態なんだ」

裏切ったら俺達が容赦しねえぞ。そんな雰囲気をかもし出しながら、彼はそういった。

「安心してくださいな。問題ありませんわ」

彼にそう微笑みかけると少女の手を優しく握る。そうするときゅっ
とこちらの手を握り返してきた。

もしかしたら、自分のほうが彼女に依存してしまうかもしれない。
ふとそんなことを思い、口から笑みがこぼれてしまう。

そうして二人と一体は月明かりのした帰路へとつくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8468s/>

IS this IS? ~いいえメダロットです~

2011年5月15日20時06分発行